

葦屋集

物集高世著

下

圖書				
二册	三五号	三架	六七函	屬類

67  
2  
35

律集卷

恋歌

恋

物集高世

あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ

思恋

あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ

思増恋

あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ  
あはれみよき心もよき人よ

思不言恋

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

人不知恋

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

おもむくおもむく

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

聞恋

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

見増恋

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

尋所縁恋

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

豊前國之佐郡幸嶋といふ所は妻むつはゆえたる人の

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

強面恋

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく

祈恋

おもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむくおもむく



忌逢恋

くまのこゝろもよみ出ぬる人なまを思ふはこゝろのこゝろ

稀逢恋

もろくもさくもむむ哉とて思ふはこゝろの人を思ふは

絶後逢恋

もろくもさくもむむ哉とて思ふはこゝろの人を思ふは

河辺の家上男女のつらさの所を思ふ

佐保河よふく形をかたむたふたふたふたふたふたふた

題はこゝろ

妹もさくもむむむむむむむむむむむむむむむむむ

別恋

あふ坂のまはりのまはりのまはりのまはりのまはりの

契別恋

あふ坂のまはりのまはりのまはりのまはりのまはりの

夜ふくもさくもむむむむむむむむむむむむむむむ

ふる坂

あふ坂の関を夜ふくもさくもむむむむむむむむむむ

題はこゝろ

暁もぬえもさくもむむむむむむむむむむむむむむむ

後朝恋

くもふと形とちれんらん立りて終るはつとあはれは別一に

願恋

あはれおのむかひのあはれおのむかひにせしむるは恋よきつゆあはれおのむかひ  
くもつくりのまの星おのむかひのせしむるは妹を人志すおのむかひ

月前願恋

袖乃る魚のまひなむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

名立恋

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

被疑恋

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

逢不遇恋

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

変恋

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

絶恋

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ

あはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひのあはれおのむかひ



我らうらなひもあはれなるものぞ

寄濱恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ

寄室恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ

寄石恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ

寄鐘恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ

寄螢恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ

寄墨恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ

寄衣恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ

あはれなるものぞあはれなるものぞ

寄枕恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ

寄心恋

あはれなるものぞあはれなるものぞ



寄催馬樂恋

あはれ親あつてととあはれあつてあつて夜ををる

雑歌

暁

あつてととあはれあつてあつてあつてあつてあつてあつて

朝

夜のほつとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

夕

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

歎

河上乃つとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

夜

ふたまたの衾くらたて世の中いかにかよとも山祿おもはう  
ほともねた命のこちのよむいかにたねふまいのしをまねく哉

名所山

ひまはるくつしておほい音かきあししうきあり大滝の山

三河國人中野清風うまひをよみつそしるか

この二村山の歌昔の鎌倉の道ハ此山をこえよあまハ

かまろのや道とめてひうへのあを怒を思ふゆむら山

近江國人藤尾景秀うまひをよみつそしるか

この名所をよめる歌の中お畑山を

里人の良うもろぬまに山や各をうりあつて也々々

東京よりくくくくく道ハ菅根山をよみつそしるか

峯のうんえをたけりかきしちたのちを

まこの山をよめる歌の穂うまふあの一の高峰をよみつそしるか

あま中山道をよめる歌の時浅間山をよみつそしるか

おほい雲よかきしつるま

えとろ先々かきしつるまの山をよみつそしるか

山路

ゆくちあまふれしつるまの山をよみつそしるか

西寒多神社の宮司おあつて時杵蓼の家よ

うんくくく杵原山をよみつそしるか

よき道にいらすと向むるも此道への頃あはれり  
くまのふりうまの昔の道おもふも答へるは  
ゆきまの山さゆふふの道こそ我のゆきまの  
宇佐神宮の参詣一々の時二の坂のあはれり長  
谷山坂のゆきま

まふ谷乃山の坂路乃くまの馬のまはれり  
おもふ時あはれり高世昔の道一からまの宇佐の  
学館あはれり生徒を教育しつるの給俵  
あはれり妻子をよめあはれりそのゆきまの  
ゆきまの此山をまはれり事を思ひ出り

妻ゆきまの山さゆふふの道おもふも

### 関路

まふ山さゆふふの関あはれり我のゆきまの  
里

まふ山さゆふふの関あはれり我のゆきまの  
まふ山さゆふふの里あはれり

### 中山道をゆきまの時遊よめあはれり歌の中

まふ山さゆふふの神乃あはれり大宮の里  
入重垣をゆきまの宿のあはれり妻のゆきまの里

### 遠村





さしあつていづれの浦もやぐさのりく船路ささきんひきぬ  
歌よめをえり

おのついでちよもいづれお船もくぬあまのこもつらつらつらむ  
嘉永七年異國の賊船よををぬといふたをいふた  
時周防國人鈴木高朝よのさ終よめ歌よめあつむ  
とくちよもいづれをえり

神風ふぶたうくもくから船のりくぬめんやえすよめを  
濱

ささきの海へらのたも入のむらむらど原もあつ浦原もあつ  
近江の海もやえよりの船もあつと波もくくぬ濱つらむせん

はつち返りもくせり東京もくくくく船路は播  
六國のまくくといふ浦も

ささきの海へらのたも入のむらむらど原もあつ浦原もあつ

河

ささきの海へらのたも入のむらむらど原もあつ浦原もあつ  
山河もやえせりもくくもくく如くええおつ哉  
ささきの海へらのたも入のむらむらど原もあつ浦原もあつ  
日向國人樋口種実もくくもくくおつ哉  
ささきの海へらのたも入のむらむらど原もあつ浦原もあつ

ささきの海へらのたも入のむらむらど原もあつ浦原もあつ

わたりての志保に河の河波のみまきよりいそいでたよき  
東京ふちりくるやれ伊能頼則の家會は水石契  
久しきふちり

よー野河水もさるまゝいふむかしのくちあちたうを  
松

この松のたりの松はむらさきの空のやうにむらさき  
高砂のまへに松とまほしうー<sup>ら</sup>かゝる老松のむらさき  
松契選年

よろつ代はむらさきもまへにかゝる松のむらさきも  
岡松

スガの松のむらさきもまへにかゝる松のむらさきも  
名所松 思ふ

千代をへてもよ老ぬるむらさきの木の松のむらさきも  
讚岐國那珂郡善通寺村乃ほしうむらさきの松の  
ふ松のり昔西行法師のむらさきのむらさきも  
ころあゝ後をとりよ松あと思ふ人もまへにかゝる  
よまよふもむらさきの名つたむらさきも其松をむらさき

名よおむむらさきの松のむらさきもむらさきのむらさきも  
うの渡辺某々急雨樓十三景の中ふ白石孤松といふを  
まへ白石山の名つた山よ古城址あり

ちくちく石のくつこし一城をもちかほよむも松のくちくちくちくち  
豊後國々東郡田深村よまの濱ち根ちくち  
松ちくち松をえんてよめ根のちくちくちくちくちくち  
二三間ちくちくちくちくち

やよ國のやまの松ちくちくちくち根ちくち木高ちくちくちくち  
かちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

山里よまのくちくち

ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

山里よまのくちくち

ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

山家隣

ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

山水の画ちくちくち

ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

閑居燈

ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

麻生公則ち旅ちくちくち

ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

平井正民ち東京へのちくちくち

ちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち



くさるたぬるをよしけきハ

もあやま月日さうり焚火のみみくは「は」のまもさうりあめ

川上橋夫うらなまらうりくふ西京よのほりたる別ふ

よめさのまのあうりけいさうりあめ國たのまのあめ

んをさうりあめ

おさうりあ道のあをさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめ

上林繁う船路よう旅一ゆたさうり別ふ

あゝ海のちうり波路をけつあめさうりあめさうりあめさうりあめ

中野素行う西京よのほりたる別ふさうりあめさうりあめ

あめさうりあめさうりあめ

万葉集の神事ありさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめ

林定信う東京へとのせんをさうりあめさうりあめさうりあめ

つむゆく人あめさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめ

筑後國人小西有孝う歌学よりる律の屋よ來居て

國あめさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめ

あめさうりあめさうりあめ

むくさの宿のかさむちかむさん君うあめさうりあめさうりあめ

松本庸夫うくさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめ

別あめさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめ

あめさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめさうりあめ

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
のみらむつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
旅に出るつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
林茂り久しき昔もせしむるもおもへしつらむのふみ道

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
思ふとせしむるもおもへしつらむのふみ道

宣教使ふつらむの時明治四年五月十五日遣外國使の  
御祭典を神祇官ふつらむの時

そと同僚の歌ふつらむの時

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道

おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道  
おもへしつらむのふみ道はおもへしつらむのふみ道



ついでにちたつておぼろげな光をうけて

くろくしよふおぼろげな光をうけて道におぼろげな光をうけて  
是久齋の人よつたて長崎へゆく別つたてその人  
齋の東京へおぼろげの光をうけてその人  
おぼろげ申しおぼろげな光をうけて

位山の宮の坂をたつて道のおぼろげな光をうけて  
明治五年はつたておぼろげな光をうけて東京よりつたて  
とて高見高材と酒のみを別を惜みたる時高世を  
今此東京へおぼろげな光をうけて高見へ  
おぼろげ仕へたつて高世をうけておぼろげな光をうけて

は國へつたておぼろげな光をうけて高  
見をうけておぼろげな光をうけて  
孫の母をうけておぼろげな光をうけて  
おぼろげな光をうけて

みの虫乃ちやおぼろげな光をうけて草葉の陰をうけて悲れ  
春のころ足立祐之の東京への光をうけて

おぼろげ酒の光をうけて

おぼろげの日はおぼろげな光をうけて時をうけて  
越後國人宮沢大道の歌学よ來居るおぼろげな光を  
時よ別をうけて七月の光をうけて

ちかひなきはるも悲し君の心もなれぬ空の秋のゆくも  
おもむく年老の事始りて

老ぬまを別れ去るよめをまふら又もあまのめれみまをまへ  
秋の野に人を送りての事始

秋の野に道を歩けぬのさうさうとわらわらわらわら  
まは秋原花をまふら来つても別れなむらあはれ

旅行

もろくのぞくまふもと思むけら旅のゆえさう成ふさう哉  
あつちの藤はまはしむららの原はまをわけてゆくといふ也

鞆中風

るもれくちや関路ふぬく風はさうさうふかくと家より

明治二年宣教使おえさうして高材をのり東京へ  
のほつ々時讚岐國多度津に船かきしりては

よりほど近れ所お中洲村とら村ありて高材の母  
有田高子ハむらとの村ありてさうさう墓あり

あまをまお思も出て高材をいれとらハ船よりあり  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

山正躬といふ者の家のあまをさうさう高子の墓  
お清水菴といふ菴にさうさうのせんをさうさう

さうさう経ぬまの道をさうさうさうさうさうさう

新編のしるし

ちしん塚をくわのりかへて来し道すむらりち

ちしん同五年東京よりくわのりかへし時ありし多度津お

船をよせり金刀比羅神社おかりける道は中洲村

のちしんしるしのしるしにふりかへし船の

出りるをたふしりししるしにふりかへし

ちしんしるしのしるしにふりかへし

中山道を経て東京よりくわのりかへし時道すむらり歌は

ちしん野の原をくわのりかへし

高崎のしるしのしるしにふりかへし

ちしんの海をくわのりかへし

道はふりかへし

ちしん山をくわのりかへし

つしんかちしんおかりし近江路のせりし長橋ありた旅の那

都へちしんおかりし

はちしんちしんおかりし

ちしん時高見高材等が品川ちしん送り來り

ちしんちしん入山とちしん所より來り

ちしんちしんちしん

ちしんちしん波ありし今もちしん

おちかゝ時道おとどめ歌とも

たしくまへ國もかろふぬるまやこ乃むせしはらみのもろも木の里  
焼太刀乃戸塚のともや馬くらうをせうかゝる人 都さるも  
三嶋河あうも水もかゝるても我父この里おやとあゝぬ  
もちろくも又もあゝるこの里あゝるはいもむらあゝるゆゑやハ  
濱松のともあゝる波もあゝるもと人よあゝる日やいは  
家人とかくといもや白須賀の里まゝ我をかゝるたゝる塚  
さく難波まゝたゝる時東京を思もやとて  
ゆゑ里あちうづくのみそとらこむもやとの遠くあゝるおとどめ歌  
又こようあつまゝ井上則一もとらこむのとも

おほやまのほくの道よくくまへ旅はまろくゆゑよつらとて

教導職ふ補せもて説教ふ巡回ーたる時

いゝるの事りくうゑの跡まゝ神の道ゆく旅もまろくれ

豊後國海部郡白杵村まゝ白木峠まゝ

くまへたゝるまゝたの峠まゝかゝる老らく塚まゝまゝ哉

伊勢太神宮おとどめ

つたゝるたゝつこのまゝの形つらせはまゝの光り世塚まゝまゝ

熊野神社

くま野まゝ有馬乃村まゝ花の時まゝあゝぬと神方はまゝ也

諏訪神社

くわにを神の先んそのむろとあてする人につくをその御社

東京よりくわくわ時熱田神宮よりくわ

大君ふるやれくえんゆら國乃人くわれたのくわれたふ

豊後國速見郡片野村宝財社の祭よりあつこの祭

日ハるよりれまハ疫病をぬくと昔よりいもつて今

も必風のふたあつては

少上國乃くわ野乃宮の神よりくわ神のまをくわ風あつて也

同國大分郡賀來村より賀來神社よりくわ

年をくわくわくわの神やくわくわくわくわくわくわくわ

私を奉をかくの大神かまもくわかてれあつてあつて

あつて速見郡宮司村より若宮神社の祠官よりあつて

くわくわ同郡八坂村より大歳神社よりくわくわくわ

高世よりくわ此神社の神官よりあつて

神垣乃くわのくわくわ祭よりくわあつての外よりあつて

太政御復古よりくわくわくわ人のよをせらるるよりあつて社頭

祝よりくわ

あつてのくわくわ社よりあつてあつてあつてあつてあつてあつて

社頭竹

あつてあつてあつての竹よりあつてあつてあつてあつてあつて

くわの学館よりあつてあつてあつてあつてあつてあつて



るを亀山の下井といふ井也

かえぬのまを井のいふたよして神のまをいふまをいふ

神社の人多くるをいふか

神もといふかをいふかをいふかをいふかをいふか

西寒多神社の官司よりあるをいふ社頭より説

教をいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ

をかきかゝるをいふ

世の中の人をいふをいふをいふをいふをいふをいふ

おれいふ神官等と中教院のまをいふをいふをいふ

お思ふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ

いふをいふ

おれいふ神をいふをいふをいふをいふをいふをいふ

本社のまをいふをいふをいふをいふをいふをいふ

てあるをいふ時神前よりあるをいふをいふをいふ

おれいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふ

宣教使よりあるをいふ明治四年十一月十七日大嘗會

をいふをいふをいふをいふをいふをいふ

おれいふの神をいふをいふをいふをいふをいふをいふ

小松正盛よりあるをいふの歌をいふをいふをいふ

して北野神社を奉るをいふをいふをいふをいふ

もよほ草やうしへ花をたれむらりりしあまのこゝと神のこゝん

七月のそらついでにうらみあやむや罪かきつゝのこゝん

あまの河のあやうくつみまはらむ哉とて神のこゝんあまのこゝん

人の病あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

神代紀をよみまゝの時

あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

三保の崎鳥のあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

垂仁天皇紀あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

佐保路よりあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

景行天皇

柏峡乃大野の石もかろつたあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

仲哀天皇

あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

神功皇后

かろ人乃あまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝんあまのこゝん

雄略天皇

百歳を成り給ふ御持一と世の中におたのたまふのと成り給ふ

顕宗天皇

民草おもしろきとていふまじき人のいふまじき人といふは

後大津宮

はつねの志賀山にさかすまの言野の花は春をいづ

崇徳天皇

とぬたのやまの松山あやむくはつねの御幸をいづ

後鳥羽院

まじきのおたの小嶋をいづまじき大君のまじき人は

建波迹安王

あつねのいづまじきをいづまじき人のいづまじき人は

日本武尊

まじき人のいづまじき人のいづまじき人のいづまじき人は

忍熊王

いづまじきのいづまじき人のいづまじき人のいづまじき人は

軽太子

宮人のあつねのいづまじき人のいづまじき人のいづまじき人は

速總別王

くまのいづまじき人のいづまじき人のいづまじき人は

上宮太子

罪人つゝまをばしてはめつゝおのむむむ君のつゝや何ぞ

山脊王

か乃寺のまはるにやういふおのむむむおのむむむ

中務卿具平親王

世の中はあつた雲ふあつたあつたあつたあつたあつた

塩樋翁

わがつこの底もくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

長髓彦

やういふおのむむむおのむむむおのむむむおのむむむ

能見宿禰

よらういふおのむむむおのむむむおのむむむおのむむむ

武内宿禰

うらういふおのむむむおのむむむおのむむむおのむむむ

甘美内宿禰

ふらういふおのむむむおのむむむおのむむむおのむむむ

熊之凝

あらういふおのむむむおのむむむおのむむむおのむむむ

物部守屋大連

佛のまはるにやういふおのむむむおのむむむおのむむむ

蘇我馬子宿禰

世の幸乃やもむの床の上よりいえたまふ一人をばむらゝ相を

大織冠鎌足大連

世の中を今からとらふに江よりたてあがりの勢うくむ

柳本人麻呂朝臣

志たよの道たもくたて人あつゝ神乃あふ祭とくをくむ

在原業平朝臣

あもことい神のふとめりてあひたしむかゝるからむ

贈太政大臣菅原公

まゝむむのつぐの海ふ入る月をたるといふをやみやこかて人

御堂関白道長大臣

もち月のみくちあふやとこいふかあふいあゝあゝ世さうん

右馬助平隆良

くむまのたまわつともいふ花山の花を人たつてくむ

保元物語をよみむ時

あふのやもむの美の人あふぬ人あつて世さうん

後三位源頼政卿

その海のを治り河波おもい漱みうち出るといふあは世さうん

六條判官為義

もちけしこのもやも雨さうてあふてん親乃さうん

俊寛

さつがつに沖乃小嶋のたれち鳥友ふをねまていむとらとふく歌  
贈中將橋正成卿

大君のちちらうやうとまの木のうもねあつめ世人もあや  
楠正行朝臣

みより野乃と野乃言はくまの木塔むさ木ふふくはじ也々  
伏見翁

あつ玉乃年の三年塔跡もあつていふおたつ時あつちあつ  
喜撰法師

な治山の山ほくたをいふもつうおさたつたのいふつふおさる哉  
影姫

あつての浪歌のたつちあつちつ朔うあつちあつちあつちあつち  
弟橋姫

わらうこの神ふまふふあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
引田部赤楮子

みよ河ふあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
飛女御

大君のちちのさつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
豊臣北政所吉子

よま河乃水のさつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
商人

市姫の神よりつとまはれた人らあはれさむあはれくばるえは魚く

白水郎

わかづみまをまみくもいもあも人へくうあもま知族とも思をむ

釣翁

船人の世帯くみくもいもあも人へくうあもま知族とも思をむ

あひゆえく時雨くうく道のあつううくあま道のうんく

かゝるくこの四五歳くうく形ううめうはれたあもあひ

とまらああゆく

むらちを歌をつまひひくもあはれたこあまうく我我をくむり

盗人ああゆみく進く

人ままきあひまみくうく思ふんうみまやまかまきく

親

子のかをおもむくうくあのおやも病をいゆ時あうけを

老

あひまみくあひまみくあひまみくあひまみくあひまみく

世の中乃ともままかかかかかかかかかかかかかかかか

かゝるくは虎のあくちえく所あり

あひまみくあひまみくあひまみくあひまみくあひまみく

虎の居る所よ山風あはれくかこふ

あひまみくあひまみくあひまみくあひまみくあひまみく

龜

さき石乃心を深くまきふゆありと萬代のいのち亀のまを

鯨

平戸の海おれのくちりのかたりみてふたあくる朝と天は空きて

あふ山寺おやどまきうたつゆ夜あつちのふたはふとふた

あふんとやうひなるあつちの僧頭あつちとまきふまを

ふあつちとまきふまを

ゆき寺のくちなり池のくち夜おきあつちのふたはふとふた

蜘蛛

ふく風おつちとまきふまをかつのまきふまをかひのうたは

蟹

あつちのふまをさるふまをさるふまをさるふまをさるふまを

東京あつちの時茶山子乃画上人の歌をむきふまは今

兵士も皆銃炮をさるふまをさるふまを

あつちの山田乃さるふまをさるふまをさるふまをさるふまを

太刀

さつちの太刀おほふまをさるふまをさるふまをさるふまを

豊後國速見郡鴨川村あつちの薬師堂あつちの

堂養老年中あつちのさるふまをさるふまをさるふまを

さ年あつちのさるふまをさるふまをさるふまをさるふまを



まへにのりてゐるの堂にくちのくちの木も終養  
老木と名つゝあはれをせむともつらむをいふか  
まへに人の養老木を木太刀塚にうつすまへに  
まへにあはれ歌塚とせむまへに

くせこの老塚やまへ木の太刀がうたをうたひのまへにせ  
難波人木津某ありて契をたぐるまへにうたひ  
まへにうたひてまへにまへにまへにまへにまへに  
まへにまへにまへにまへにまへに

世の中まへにまへにまへにまへにまへにまへに  
まへにまへにまへにまへにまへにまへに

あつちのまへにまへにまへにまへにまへに  
東京へのまへにまへにまへにまへにまへに

あつちのまへにまへにまへにまへにまへに  
讃岐國丸亀ふりて時ある人近れ所ふりて  
まへにまへにまへにまへにまへにまへに  
まへにまへにまへにまへにまへにまへに  
まへにまへにまへにまへにまへにまへに  
まへにまへにまへにまへにまへにまへに  
まへにまへにまへにまへにまへにまへに

思ひまへにまへにまへにまへにまへにまへに  
石見國人橋本忠久の消息のまへに 世は高くふりて

ふゆもほそれを人つゝおのそぢいへん哉いひおこ  
せらるゝかゝる一お

郭公のむらさきふたゝむらさきあゝめを世にうつろはせむ  
九月九日外永陣正中野恭行林定信等と酒のみ  
歌文のむらさきよるにける時をむらさきよるはなれり

長月のおのむらさき一お志たへるの道のむらさき我は乃ほそめ  
紀伊國人佐藤春朝うぢむとよた御さうよう唐  
木一いつくもむらさきをよる家の室をよるよ  
ろくおふ一國人熊代繁里よるよる歌もむらさきよるよ  
鯨むらさき野乃海の底むらさきよるよる歌もむらさきよるよる

むらさきよるむらさきよるむらさきよる時人のむらさきよる  
むらさきよるむらさきよるむらさきよる

むらさきよるむらさきよるむらさきよる玉乃緒のむらさきよるよるむらさきよるむらさきよる  
病ありつゝむらさきよるむらさきよるむらさきよる人のあは  
むらさきよるむらさきよる

むらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよる  
むらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよる

むらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよる  
むらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよる  
むらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよるむらさきよる

あつたつからしてつむおもやあつたつあつたつをえ  
てまきあをみりとほまひとて

よろは代よまきあを宿をへえりりか今よのち終れりか  
又その家いぬくあをまきまき公律の屋と名つをり

まふせん玉乃くしれあむむくあむくろあむくろ我いみん  
宣教使よあつたつ時同僚と日勤のみとれたつあつたつ

らむらむはむらむ

大殿の神塔乃くまきあを日とあまきと御門をひめ日ひ

おれくろ何とあくあめ歌の中よ

あつたつ神あつたつてあつたつとひと妙あつたつ世よあつたつ哉

明治四年九月十三日 主上神祇省お臨御あつたつ

天顔を拜く

あつたつの日乃外のむらむらむかこれたつあつたつ哉

維新の御代とりつたつあつたつとあつたつあつたつ人よ

あつたつあつたつあつたつあつたつあつたつ御代とりつたつあつたつあつたつ

はまきあをまきあをまきあを國へくろくろ時

真のつらまのあつたつあつたつあつたつあつたつあつたつあつたつ

人あつたつあつたつあつたつあつたつあつたつあつたつあつたつ

くろの山あつたつあつたつあつたつあつたつあつたつあつたつ

あつたつ時あつたつあつたつあつたつあつたつあつたつあつたつ

大君のまことの心をあらわす草木はさめくはばか耶

述懐

山一りのまことの心をあらわす草木はさめくはばか耶  
人よー我ハ我ふくとおれんとすくめて世の中をくもあつたを  
世の中をくもあつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを

慶應二年長州征伐といふ時

世の中をくもあつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを

心くもあつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを

心くもあつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを  
心くもあつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを

くもあつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを

世乃中へあつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを  
むとつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを

中山道加納駅をくもあつたをくもあつたをくもあつたを

おもふかまの里乃里人を世をくもあつたをくもあつたを

獨述懐

おもふかまの里乃里人を世をくもあつたをくもあつたを

閑中述懐

あつたをくもあつたをくもあつたをくもあつたを

寄風述懐

山をわたるにふくとたぐひふらふらうらうらう世がわづらひのこし

寄山述懐

くたすつらふ山とまうまうまう世がむむむむむむむむむむむむ

東京より

まごの山若らあう道やまううらるるうらるるうらるるうらるるうらるる

寄橋述懐

くたすつらふ我がおらうつせ乃中終らわらうらるるうらるるうらるる

寄水述懐

あふらるる乃野中のまうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

寄松述懐

まうらるるく老をまうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

無常

水の上らうらう泡乃たえきうらあははらうらうらうらうらうらうらう

師の大人 定村直孝 乃らるるらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

世の中ふあくはあくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

宣教使あうらうらう時桑名藩士滝鉄次郎女良う今年

十九歳うらうらう若たうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

始てのうらあかたおたうく自殺うらうらうらうらうらうらうらうらう

僚宮田諸助うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

國ふうへ家ふうへまうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

手嶋直行の娘と称れ女子を〜

あつたあつたおのほほいといふも〜

讃岐國ふあつた時を〜

國へあつて後おぼつた〜

あつたあつた〜

あつたあつたあつたあつた〜

如珠子のおもひのあつたあつた〜

あつたあつたあつたあつた〜

あつたあつたあつたあつた〜

あつたあつたあつたあつた〜

あつたあつた

あつたあつたあつたあつた〜

佐藤千英の春の頃〜

あつたあつたあつたあつた〜

世の中のであつた春〜

讃岐國ふあつた時〜

あつたあつたあつたあつた〜

旅あつたあつたあつたあつた〜

あつたあつたあつたあつた〜

あつたあつたあつたあつた〜

るをとおもむ

かゝるもあま灰とよまじりてまよふもよまひおそえて影もよほりてええあ

阿部貞子うさむらうをよまひていひお高田といふ所にお

しと回くしと終えて

よまらるゝ高田乃里おつゝ回らあやまゝいしと終やあまんと

岩滝傳う七月の頃をさるゝまゝい

あゝあま乃まゝの秋乃うねいしと君う人およまらるゝまゝい

是永吉雄う秋の頃をさるゝけり

おほくこの秋をよまゆ人かゝるうかふいしと時をさるゝまゝい

あゝ僧のよまらるゝまゝい

今よりハたえまのくしとまをよまふつものまゝい

宣教使おらるゝ時明治三年五月六日北条河岸

まゝ紀州邸まゝ荷田賀茂本居平田四大人の灵祭

あゝまゝい同僚とまゝい参詣

おほやまよめみのまゝいおほく花のまゝいおまゝい

十市石谷翁の追慕會おまゝいおまゝい

まゝい画とまゝい

むいおまゝい涙おまゝい水くた乃あまゝい

紀伊國人堀尾三子う父の十三回忌よ寄花懐旧といふ

題を歌をむまゝい

けしきもあはれきとぬ春のふとほくおのひ出らる花咲みくも

奥村孝之の父壽胤の十三回忌の同題より

もろ人も今もあはれきとぬ花のむらりおのひ出らる

杉村直樹の先祖の百回忌の春懐旧

おのひもあはれきとぬ昔の春の同題より

あゝ人の二百回忌の同題より

我こそはなれとあはれきとぬ春の同題より

有田高子の十三回忌の夏懐旧の同題より

歌よかきとぬ

むらりあはれきとぬ春の同題より

梶江高峰の母の墓の同題より

ふたもあはれきとぬ昔の秋の初風

重田保雄の父の十三回忌の初冬懐旧

年若くもあはれきとぬ神無月の同題より

源二位頼朝將軍の六百回忌の鎌倉懐古の同題より

東京人本堂内膳の同題より

山川乃もあはれきとぬやまの今もあはれきとぬ

慶賀

ちかやあはれきとぬ神國の世の同題より

わらひあはれきとぬ萬代の君の同題より



中根正中妻のくちしほひをむす

くちしほひのくちしほひの松のくちしほひの中の子代かたし

小畑有隣のおちしほひをむす

むすしほひのくちしほひの家の中の子代かたし

吉武静夫のおちしほひをむす

くちしほひのくちしほひの松のくちしほひの中の子代かたし

加來惟寛のおちしほひをむす

くちしほひのくちしほひの松のくちしほひの中の子代かたし

天長節おむすの徳川氏の時の子代かたし

やみ夜おむすの世の中の子代かたし

本多正辰の孫のくちしほひをむす

くちしほひのくちしほひの松のくちしほひの中の子代かたし

外永陣正おむすの初雛のくちしほひをむす

くちしほひのくちしほひの松のくちしほひの中の子代かたし

小深田範江のおちしほひをむす

くちしほひのくちしほひの松のくちしほひの中の子代かたし

林茂の母の六十賀お

くちしほひのくちしほひの松のくちしほひの中の子代かたし

加藤景彦の母の六十賀お

くちしほひのくちしほひの松のくちしほひの中の子代かたし

蜷木公盛六十賀お歌多くあつたやう

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

堀某八十賀お

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

春祝

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

寄梅祝

君の代のあつた春をうらやま梅の花をうらやま

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

芝置正直つるあつたあつた後閑居祝の歌

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

明治二年東京よりあつた道遠江國荒井駅飯

田某の家あつたあつたあつたあつたあつた

行幸ありし時の御あつたあつたあつたあつた

の歌をよ某うらやまあつたあつた

あつたやうにねえ人々のいのちをいかに守るべきか

野村忠知新室祝

君をよみはつらうらんほけりてふまふまふハありて家もくえふな  
宣教使ふありり時同僚もくお宣布大教詔をよ  
まひりて

大君のち乃御代さうりたつちのさうゆの時ハありて思ふ  
辞格考とらふ書をあらうりて竟宴の寄書祝とら  
ふ題ありちさうりて歌よるせりてふて  
まふやちおとらふまふさ道とめてふまふ人乃ありてむらさきと

枚岡真守の六十賀の寄松祝

まふちの松ふもくまふぬよろうつ代乃りちまふも君のまふまふさうりて  
渡辺重春の父重蔭の七十賀の同題あり

まふの江の松よろらちの世乃中まふもくちの君のまふハありてぬ  
木戸某の六十賀の同題あり

まふまふこの松乃る松の松まふもくちの君のまふとせ乃りちまふハありてぬ  
照山玄弘の五十賀の寄竹祝

まふ竹乃らハありてまふもくちの君の代をまふもくちのありてぬ  
柏光忠哲の子忠謙の月乃る病まふもくちのありてぬ  
一は時ありてちかからしめおこりてまふもくちのありてぬ  
おれ一題あり歌をむらさき

まふりておむらさき竹乃子の千代まふもくちのありてぬ  
寄山祝

君が代と云く千年山と云く松もかき野もかきと云く思ふ

東京ある人の賀も同題あり

もえの松をたもちつらうの山もももつたもももつた君はうさひよ

宣教使より人のよきせらるるふよめ。寄野祝

むさし野を今もつらうせへ大君乃御代のそとふたところ也をう

幸遇太平代

我國がくくちやき國とやあや大君の代もあそおもむと云くはま  
しつせいのちの國もつらうつらうみとたをむる世もあ成るる哉

旋頭歌

花

万ふたより万つらうふらとちかちとあはとあまはくく花時と云く  
まもやうとくさくあ

男女居る所は郭公あくかあ

たつつや八君もたれいもそ我も又ひさしあそくたをひくあああ  
と人もあそあそ

初秋

もさうこの月のあまさあ秋はたふも今もあやうはあ  
まもあひむとさうあ

歳暮

ゆく年帰いつちゆく人きあへしと思ふむのちかへ  
るるねまう

讃岐國の金刀比羅神社おまうて

よきちたふ神ちたふをちたふちたふちたふちたふちたふ  
くの神の御稜威を

世治民樂

人よれふとまおちたふをちたふちたふちたふちたふちたふ  
るれ世ふちりぬ也

長歌

春日郊行

霞たつ山さえゆるさ山谷をちたふちたふちたふちたふちたふ  
まを野つらふはじふほふちたふちたふちたふちたふちたふ  
一花白るる花ちたふちたふ花さるる花妹の家つちたふせな

又

雉子よく困るるをちたふ水めつち谷河ちたふ霞たつ山さえく  
まふ岩陰ふちたふはどのちたふちたふ妹の門のちたふ此馬

野遊

春霞ふたつゆく野へとほつり花をみるもよるにえはいつくふる葉を  
ききしつちのほろもふとちかやハ蝶をいひゆく方知ること  
み尋ねるもえと阿らむハ阿らむもよるにちかやハ阿らむ  
も芽花ちかやも阿らむもよるにちかやハ阿らむもよるに  
ちかやハ阿らむもよるにちかやハ阿らむもよるに  
ちかやハ阿らむもよるにちかやハ阿らむもよるに

仙花

信楽乃真木の志守山仙花とくくくる來とくくく霞く峰のを  
くんと雉子取くく谷のやとくくふとくく花とくく咲く仙人とくくお

もぼき宮木ハ檜の木とくくねん船木ハ楠の木とくくねん心とくく  
芥とめとくくやとくく桜に

行路落花との歌ふくめとくくよ

ちち花を薫ふむ如くくくくくくふみふくくく風流士ふくく  
物方をとくくくの道ハとくくハたかをねん道のとくくあまふたをよとくく  
くそつちとくく阿らむく草鞋香ふ白ふ花ふちりきとん道とくくお  
我とあはれと君と為と終とくく見ハ今日ハ此花うれを死とく  
明日ハ其薫る方とくく道の面たつめとくくん終とくく日たよとく

池辺藤

我宿乃池の堤ふくちあむたとくく藤波つらと人ハとくくつらと

あまの心はくも縁ふらふをせそ我こそいふものも何のめもねふんぞ  
おもてんおもて池の心と

田家暮春

甘菜こそ花ちつふも辛菜こそ実ふちつふも苗代の時  
ねもやうやうから菜むねあも菜畑かきその畑を田つくとん  
とねのふこそそいもつとつとまをこそいもねのまをまふつのもあ  
まぬる春そいもねも水もせねのまをまねもねもねもねも

豊前國宇佐郡佐田村ありつら時そとまふらふんあ

み山といふ山は郭公のふねをねた

春もねて夏もつくとまふちつふ水枝をかきつふやうふよあ

まうかそまも木々乃葉を八重垣ふくね乃の妻も先々み山よ夜  
中ふふく郭公ふくねたもやとを草枕もむねをいつとら  
もつらねも悲しも妻もふんあ

早苗

あーむねの山回ふらつらつらも苗やうのこねる為の  
やう虫乳根の親乃為若草の妻乃為うその妻とあむねむ  
ほとふいもあむねの子の為うやう苗とら男

安東正之の酒のみと月夜つとら

思ふもつら月夜つとら酒のみとあむねのこねる為の  
つとらあ今つとら我いつとらつとらつとら今孫も月夜つとら

八月十五夜をさうまつて月をのぞくお隣

家の人あまの酒のみの。かきくせえんたまハ

秋夜の月終あまみよやむ終のやむ終やんと思ふもら  
ようつとむて歌おむむらとおもむく心と  
まよはゆむむらとおもむく酒のみのくまむみまむみ  
あまみよあまみよのくまむらとおもむく月をさうまつ人  
かきくせえんたま

市中月

妹は玉とよやむと妻は鏡をかんと西の市みよら来  
るまはつしつと日ハくまむらとおもむく市のくま木は梢よ

く月を山にまらまらとくまむらとおもむく乃かみかきくせえんたま

白玉市人まらまらとくまむらとおもむく心とくま

市人まらまらとくまむらとおもむくくまむらとおもむく月のおまむら

搦衣

庭ふら麻をむたほ一垣おらる木綿をたぬらあまの  
ふふ糸まらへて拵機多く倭文機おきて袂よく肩よくぬ  
む着せ垢つちはあまむらとくまむらとおもむく秋  
風乃まむくぬ夜の月くまの肌まらむ夜まらまらと衣  
くら妹の形くまらとくま

紅葉



小垣内ふらきあるお原—その花乃くまつ—めめその花の志  
もみふも—吾妹子うき—原その志ほりえてふらめくし  
や又さうふち—原その志ほりえて今—濃—をらたゆむ  
かちけ原—を先木綿の方をゆたきふてうりあり—かみ  
ち葉の色ち乃色なる

かみち葉の汁をみゆて—その志あるのや—原乃衣そのあはきやんり  
九月の末つるおゆたき—道おえ思をうて

秋風のふく山つや乃をみち葉のちる田のあおあをぬて  
霜—をハおちくまゆたか—おちくまゆ霜乃よむたこの  
ちるその山乃その田志めや—鷹を簷よふたて—葉を

床ふハ志たてつくり—小屋の志丸屋おむむてをむ—人あ  
まきくふおありや

橋上霜

鳴乃ふく片山おろ—ふを—くちる—みち葉—谷河  
うき橋—人皆をたのふゆたぬ—ふも我ハゆ人と志  
の—の—あ—あ—あ—出来ま—人皆をたの  
おちら—白妙お霜—おたて—おん跡—をうけ  
橋乃—

ち—の—跡—を—おん跡—を—おん跡—を—  
わら葎の屋乃歌—霜月—

むくぬの垣内の畑ふ青菜くゝ大根菜おほしその畑ふ乾ふ  
乾ふおぐ霜月乃むようの空のくくくのやとた時ふくを出  
おむくろ女志たふくふ薦菜たふむわうく子をさそうか  
ら吾妹子ハあをを菜つてほし我ももおほ給ふたほしそら  
もふふとねむあう乃ものしむむむめ

豊後國大分郡鶴崎村より向うなる道に萩原の濱筑

ふんやふん

天うも鶴崎をくもめく風の乙津をきたて磯崎乃松原志  
おむくくとわくふんをせハ萩原乃浦の波のくくくハ濱辺を  
たよみ藻潮くむあの方の女もああいん心もあまをさむゆん

よりのまをくハ大船乃思むまゆも玉梅乃道の岩根ふくわ  
はあう

同國々東郡田深村の濱より姫嶋へくくんとく十  
市安居あうくもく時ふあめやまの濱とくハあ  
田深乃浦のつくたあう

をく給く田深乃浦あうくくくくわんをくせと姫嶋ハはし  
るあう朝ふたふ船をたうくくあふ船をたうくむ志を  
らくの鳥とのうらまをくくくあふ女くむくやハ君くくくや  
まの濱松やまうかあうく後ふ又あうんとよ

慶應二年のころ日田実の亞墨利加國へくくんとく



ろくろをまきあはせむ空蟬乃世地をるめり夏引のよ引  
乃糸のこもちたふ長くもふも百歳ふあふる命ふたぬ身ふ  
まふ

安田正齋のよやふて題をうらむ歌よみたる時を見と  
ふ雨ふたふふめきて我門ふ飯ふかふる飯ふたてた  
笑ふあめめふふう飢ふやふふたふふめふふふふ  
ぬふ雨ふ笑ふあふふ我門ふめふふふふふふふふふふ

勸学歌

歲月ハヤシメオホキキオホキオホキオホキオホキ  
日とあつてうすくはる年やをたたとふうう今年もくく物

もまふ時といつて何事もふふふふふ身ハ老を  
ぬあふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
事ハあひも今年よりなふ月日ハあふふ我もまふ  
若た時ふふふふふあふふふ

あつてはむあつてはむあつてはむあつてはむ時

空蟬乃世の人とぬ乃時のふふ事ふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
かふもあふ物とふふふ書目ふふふあふふ琴ふたを  
ふ荒玉乃年の八年をたふふふふふふふふふふ  
はつたぬふふふふふふふふふふ蜘蛛のまかくまふ



影うつる魂をうらな

明治元年佐田秀久勤王の軍功ありて豊前國宇佐  
郡佐田村なる馬城峰ありて其の肖像ありて  
てしち死する後同村人佐田飛霞其の肖像ありて  
て歌ありて其の肖像ありてかたつては秀久の  
しる子ありて其の肖像ありて

おのれおのれなる山ふりておのれの高峰おのれなる霧と  
そはたてたる雨とそはたてたる君思ふとそはたてたる息その  
そはたてたる雨とそはたてたる君思ふとそはたてたる息その  
そはたてたる雨とそはたてたる君思ふとそはたてたる息その  
そはたてたる雨とそはたてたる君思ふとそはたてたる息その

馬城の山ふりておのれの高峰おのれなる霧と

清水せれ子う六十賀ふ

天ちるや真名井水ハ千年をてくめともつれを萬代経てく  
免ともかきまもの水のうきぬり如その水ちつれぬり如その  
清水の君ハやとてふふせ

師の大人の父君の八十賀ふ

空蟬のせ乃長人くつせ乃世の遠人世乃中よもきある人とや  
そちるや君をひてひて今ちるやふもきあるやあや風乃音  
のとはれ昔乃ちりてふらむつれ來らく大方の世ふある人  
乃六十歳せれ七十歳せれ玉の緒乃ちりてふらむつれ來らく







高世の思ふ所を以て其の如くを述べる  
 ことありきやあつては其の如くを述べる  
 と教のんしと解のほしきしと其の如くを述べる  
 人しと其の如くを述べる事ありきやあつては  
 ことしと其の如くを述べる事ありきやあつては  
 世にありやあつては

明治九年十一月

大分縣豊後國速見郡杵築村

林 定 信 識

物集高世著述書目

- |      |        |
|------|--------|
| 本言考  | ふも道乃日記 |
| 辞格考  | 同 続篇   |
| 同抄本  | 少きむがら  |
| 歌学新論 | 古言通音例  |
| 笹屋歌談 |        |
| 同 文集 |        |
| 作文要語 |        |

67  
2  
35

明治十年九月二十日御届

定價六十銭

自詠編輯人

大分縣士族

物集高世

大分縣下第二大區二小區  
豊後國速見郡杵築村四百貳番地  
同縣士族

出版人

物集高見

東京第二大區一小區  
裏霞ノ関三年町二番地寄留

芝露月町

米倉屋順三郎

小石川大門町

雁金屋清吉

發行書林

